

さまざまな挑戦 —垣根を超えて、国境を越えて—

秋の水曜日の夜 7時45分～9時15分

赤坂キャンパスで、またはご自宅から zoom で、リアルタイムでご参加を見逃しても、来年2月28日まで録画を見放題、聴き放題です(^_-)☆

ゴリラの観察から人間の挑戦行動を推理する京都大学元総長、日本の歯科保健に革命を起こし、スウェーデンから博士号を贈られたレジェンド、植物学研究、そして脳神経外科医から転身したリハビリテーション医学の第一人者、重度訪問介護をビジネスのパイオニア、聴覚障害と視覚障害をあわせもって活躍する東大教授……。

垣根を超えて医療・福祉を改革しつつある方々をお呼びして、その挑戦の背景と極意を学びます。フィンランド、フランス、スウェーデンの経験からも。

回 日	講義名・講義内容	講師
1 9/11	垣根を超え、国境を超えて挑戦すること	国際医療福祉大学大学院 教授 大熊 由紀子
2 9/18	人生 100 年時代に向けて ～8020から KEEP28へ～	日吉歯科診療所 理事長 熊谷 崇 先生
3 9/25	日本にもクライシスセンターを ～フィンランドからの報告～	kokko 奈良クライシスセンター 代表理事 岡本 響子 先生
4 10/2	植物学⇒脳神経外科医⇒リハビリテーション専門医 ～転身の中で、つかみとったこと～	浜松市リハビリテーション病院 特別顧問 藤島 一郎 先生
5 10/9	都会で精神病院をなくし、1年たって ～PSW、薬剤師とともに～	医療法人ディープレインテンション 日吉心療所理事長 熊田 貴之 先生
6 10/16	EBM・NBM・IT、そして、SDM ～患者「と」、医療者「で」、医療を変える～	京都大学医学部・健康情報学 教授 中山 健夫 先生
7 10/23	下剤ゼロ、機械浴ゼロ、寝かせきりゼロ、拘束ゼロ ～7つのゼロに挑戦して～	社会福祉法人愛隣会 総合ケアセンター駒場苑施設長 坂野 悠己 先生
8 10/30	聴覚障害と視覚障害をあわせもって ～見えること、できること～	東京大学先端技術センター 教授 福島 智 先生
9 11/6	「重度訪問介護」をビジネスに ～異端の福祉といわれて～	株式会社土屋 代表取締役 高浜 敏之 先生
10 11/13	ひとりひとりに届ける福祉が支える ～フランスの子どもの育ちと家族～	日本学術振興会特別研究員・パリ市ソーシャルワーカー養成校 AFRIS 顧問 安發 明子先生
11 11/20	介護は命懸けで親がしてくれた教えだった ～認知症介護のリアル～	映画監督 信友 直子 先生 脳科学者・東京大学大学院特任研究員 恩蔵 絢子 先生

回 日	講義名・講義内容	講師
12 11/27	驚きの介護民俗学 ～それでも私は介護の仕事が続けていく～	デイサービスすまいるほーむ 管理者 六車 由実 先生
13 12/4	人生で大切なことは、 すべてゴリラからおそわった	京都大学 元総長・人間文化研究機構総合 地球環境学研究所 所長 山極 寿一 先生
14 12/11	垣根はみんなで超えるもの	医療法人大誠会 理事長 田中 志子 先生
15 12/18	聴講のみなさんの「礼状風レポート」から 見えてきたもの	国際医療福祉大学大学院 教授 大熊 由紀子



ご希望の方には、9時15分の授業が終わってから「放課後」も。

左は、**赤坂**で。塩崎元厚生労働大臣と日本で初めて精神病院をなくした長野敏宏 doctor を迎えて。同じ愛媛県なのに遠く離れているようで、この日が初めての出会い

右は、「こうのとりのゆりかご～15年」で医学ジャーナリスト協会大賞を受賞した熊本日々編集局次長 田端美華さん(熊本から **zoom** で)

Medical journalist 100号記念号 2024年8月1日発行

日本医学ジャーナリスト協会の前身

「7人の会」が切り開いたこと

「7人の会」は、不思議な会でした。所属する組織はライバルどうし。にもかかわらず、集まっては、日本の医療を憂えたり、エールを送りあったり、本を書くとき、あらかじめ読みあったり。

のちの医学ジャーナリスト協会賞の評価基準になった「社会へのインパクト」「オリジナリティ」「科学性」「表現力」に加えて、「患者の視点」「医学界や政府への反骨精神」を秘めていました。

●「染色体」から「誤診・薬禍」「診療報酬」まで幅広いレパートリー



最年長の岡本正さんは1921年生れ。若いころ、結核で死線をさまよった経験の持ち主です。

日本初の“患者の、患者による、患者のための雑誌”、『保健同人』の編集長でした。

左の写真は、この雑誌の表紙です。

日本画壇の巨匠・東山魁夷さんが、若き日、表紙だけでなく、挿絵まで手がけました。弟さんが、結核を病んでいたのです。

2歳年下の大熊房太郎さんは、教授選と医療過誤をテーマに、後に映画やテレビになった『白い巨頭』をサンデー毎日編集部で手がけました。

医学博士号をもち、「あれは、山崎豊子じゃなくて、僕がほとんど書いたんだ」と豪語するのが常でした。

房太郎さんと性格が真逆な青柳精一さんは会のまとめ役。1924年生れ

で、朝日新聞社の「モダンメディスン」編集長。医療制度とその歴史に関心が深く、著書、『近代医療のあけぼの～幕末・明治の医事制度』『診療報酬の歴史』は、「具体的な資料を使いながら、政治を動かした人物を彩り豊かに描いた」と評価されていました。

昨年亡くなった医学ジャーナリスト協会・第2代会長、伊藤正治さんは1925年生れ。「いつもニコニコした優しい人」とだけ思っている若い方がいるかもしれませんが、実は、医学ジャーナリストの草分けでした。

共同通信から発信した記事は全国に配信され、『成人病のすべて』『痛みのカルテ』『こどもの病気』などにまとめられました。

「全国各地を訪ね歩き、一般の人がわかり、しかも正しい。そこが、専門家が書いた解説書とは違う」と医学界の重鎮にも一目置かれました。

村松博雄さん。1926年生れの産婦人科医で、おだやかな人柄、あたたかな言葉づかいで、テレビドクターとして著名でした。

『ぼくは町医者』『10代の愛と性』などの多数のベストセラーに加えて、『性教育学入門』のような学術書もあります。伊藤正治さんが唯一踏みこめなかった、当時は眉ひそめられた性教育の分野で、数多くの著書を出しました。そのときの絆が、のちの「調査報道」につながりました。

読売新聞の宮野晴雄さんは1928年生れ。『染色体は語る』『ビールスを追って』の連載など、純医学的な科学記者の草分けとして知られていました。

ところが1973年、『誤診と薬禍～医学記者の提言』を書いて、医学界を騒然とさせました。誤診や薬禍の背景にある構造の分析は鋭く、その指摘はいまも通用します。

はにかみやで謙虚な方なので知らなかったのですが、東大法学部出身。「法学」という特技を発揮したことを、後で知りました。

医学ジャーナリスト協会が、宮田親平・第3代会長のもとで『人は誰でも間違える～より安全な医療システムを目指して』、大野善三・第4代会長のもとで『患者の権利宣言と医療職の倫理綱領』を翻訳して出版したのが2000年と2003年です。それより30年も前に医療過誤が生れる構造を明らかにした宮野晴雄さんの先見の明に、いまさらながら感動してしまいます。

●「雨乞いの論理」「3“た”の論理」「プラセボ効果」

この6人と年が離れていたのが、1934年生まれの小枝一夫さんでした。北海道新聞の科学記者時代の連載『生命を探検する～分子生物学』が注目されて講

談社のブルーバックスに加えられました。そのブルーバックス編集部に転身。

手がけた本『薬の効果・逆効果～臨床薬理学入門』や『ただしい治療あやしい治療～紅茶キノコからがんワクチンまで』（右の写真）は、当時の医学界の常識をくつがえすものでした。



「男子に限る」と募集要項に書き続けていた新聞社が、ほんの一瞬、扉をあけた年がありました。東京オリンピックを2年後に控えた1963年のことです。

「オリンピックの華は、女子選手村。ところが、そこは男子禁制」と知って。どの社もあわてふためき、渋々、女性を1人ずつ採用。私も朝日新聞にもぐりこむことができました。

もともとが“リケジョ”の私、オリンピックが終わって、念願の科学部に。

当時の科学部の先輩方は、天文、数学などアカデミックな香り高い分野を深めておられ、入社3年目の超下っ端の私は、先輩が敬遠する健康分野を受け持つことになりました。指南役がないので「心細さも極まれり」の私を、朝日新聞の先輩、青柳さんが、この会に誘ってくださいました。

ちょうど、大熊房太郎さんが抜けたところだったので、房太郎を由紀子に変えて「7人の会」が再発足しました。よく間違えられるのですが、房太郎さんと私、血のつながりはまったくありません。

科学部の使命の1つは、社会部や支局、経済部が出稿してくる“非科学的な医学記事”を、出稿部の誇りを傷つけず、どうやったら朝日新聞の紙面からなくせるかでした。小枝さんのご紹介で懇意になった『薬の効果・逆効果』の著者、佐久間昭教授が発明した言葉が、征伐に威力を発揮しました。

1つは、「3“た”の論理」。「使った⇒治った⇒だからこのクスリが効いたのだ」という、「前後関係」を「因果関係」を取り違えた記事を、ボツにすることができました。

「よく効くお薬ですよ」とお医者さんが渡すとメリケン粉でも効いてしまう「プラセボ効果」、人間のからだにそなわっている「自然治癒力」を、因果関係と錯覚してしまう。そのようなことが、専門家と呼ばれる人たちに知られていな

かった時代でした。

佐久間さんは「雨乞いの論理」という言葉も“発明”しました。

「雨が降りますように、と太鼓を叩き続けた⇒雨が降った⇒神様がお聞き届けくださったのだ」に似ているというのです。雨乞いは、雨が降るまで太鼓を打ち続けるのですから、かならず雨は振ります。

それと同様の「薬効についてのまことしやかな研究成果」が、大手を振って学会で発表されていたのでした。

●名誉院長の連続医療過誤事件

糖尿病で目が不自由になり、その上、当時のことばで「脳軟化」、いまでいう認知症になった名誉院長が自信に満ちて手術を続け、まわりはただオロオロしている。そして次々と出る犠牲者。

そんな恐ろしい日々にストップをかけた記事も「7人の会」から生れました。何とかして院長の暴走を止めなければと憂えた産婦人科医局長・謝国権さんと私を、村松博雄さんがこっそり引き合わせてくださり、医学的な助言もしてくださいました。

村松さんと謝さんのお二人は、当時、袋だたきにあいながらも「性についての正しい知識」を世に知らせようとした同志だったのです。

私は、被害者の住所氏名の一覧表を受け取り、一軒一軒訪ね歩きました。

無謀な手術で母が亡くなった日の2日前が誕生日という幼な子に出あったときは、涙がとまりませんでした。

「調査報道」という言葉がなかった時代でした。

「厚生省の調べでは」とか、「警察の発表では」という「つかえ棒」もなく、記事が日の目をみるには何重もの困難がありました。

それを、やっとのことで乗り越えて1969年6月1日、朝日新聞の朝刊社会面に記事がでて、院長は引退し、被害はとまりました。

●必要なかった和田心臓移植

各紙の記者たちが称賛した札幌医大・和田寿郎教授の心臓移植。

1968年8月8日未明の第一報を聞いたとき、私は、なんだかおかしいと思いました。心臓を提供することになった山口青年は、海で溺れたあと、はるばる札幌医大に運ばれ、「蘇生」のために人工心肺が使われたというのです。蘇生の目的で人工心肺を使うなんて聞いたことがありません。

心臓を生きのよい状態に保つためではないかと私は疑いました。

疑念はもう1つありました。和田教授の論文が専門誌『移植』に1度も載っ

たことがなかったからです。

拒絶反応をのりこえられるだろうかと気がかりでした。

7人の会でこの疑問について話してから2年たった1970年の5月、読売の宮野晴雄さんから電話がありました。札幌医大内科の宮原光夫教授が専門誌『内科』の論文の中に、ごく小さな文字で、〈注〉のかたちで心電図や心音データを示して、「移植は不必要だった」とほのめかしている」というのです。

早速、宮原教授を訪ねました。ところが、大学から内部告発者と思われることを恐れて、逃げるばかり。

ただ、宮原さんと話しているうちにわかったことがありました。亡くなった宮崎信夫少年の遺体を解剖した病理学の藤本輝夫教授が、「医学者として、あつてはならないことが行なわれた」と憤慨しているというのです。

論文がでるのを待ちました。

藤本さんは「行間に滲ませ」たり「ほのめかしたり」することもなく、「少年の心臓の弁は、重症の別人のものとしり替えられていた」「血液型などから、それは明らかである」と論文ではっきり指摘していました。

和田教授は宮崎少年の病状について「心臓の3つの弁が、3つとも、箸にも棒にもかからない絶望的な状態だった。だから移植するしかなかった」と記者たちにくりかえし伝えていました。

「3つの弁のうちの1つだけをとりかえてほしい」と心臓内科が和田教授の心臓外科に送ったのにもかかわらず、です。

1つの弁だけを取り替える手術をしていたら、宮崎少年は手術後83日で死んだりしなかったことでしょう。

この問題では、その後、日弁連が調査委員会を作りました。

岡本正さんが司会役をしたシンポジウム『和田心臓移植を告発する～医学の進歩と病者の人権』は保健同人社から出版されました。この本には若月俊一さん、中川米造さん、松田道夫さん、中川善之介さんたち重鎮、作家として有名になる前の札幌医大整形外科講師の渡辺淳一さんが参加して、「無謀な実験的医療」への歯止めの役割を果たしました。

●そして、次々と世を去って。。。

7人の会の先輩たちは、みな、次々と旅立ってしまわれました。いま生きているのは私だけです。

忘れられないのは、岡本正さんの葬儀でした。

それは1980年の1月13日の寒い日のことでした。駆けつけた約500人全員に1通の手紙が配られました。

「私は、いま死に直面して、少しの不安もなく、みなさまへの生前のご厚情への感謝だけに心がみたされています。そのことを私からもうしあげたかったのです。……ご会葬のみなさま、遠慮など、くれぐれもなさらないように。ふきっさらしの道でふるえてはいけません。どうぞご遠慮なく。」

この手紙。夫人を悲しませないようにと、夫人のいないすきに岡本さんが実弟に頼み、暮れには、印刷を終えていたのでした。

雪のなかを駆けつけた誰もが、「岡本さんらしいなあ」と手紙に見入っていました。

日本医学ジャーナリスト協会の機関紙 Medical journalist はモノクロ。東山魁夷さんの表紙がモノクロでは、もったいないので、カラー にしました。スペースの関係で削った文章を少しだけ復活しました。

このページのURLはこちらです <http://www.yuki-enishi.com/yami/yami-00.html>

精神医療の「闇」

目次

★[精神病院・認知症の「闇」に9人のジャーナリストが迫る](#)

2023年9月の「えにしの会」のクロストークに新たに書き加えました。
裏表紙のグラフをみるだけで、日本の精神医療の異様さがわかります。。

- [帯つきの表紙](#)
- [9人のジャーナリストと時男さん](#)
- [目次](#)
- [はじめに……なだ・いなださんの知恵を借りて潜入。。](#)

★[「まちから精神病院をなくしアボガドの森と宿に～入院していた人たちは、いま～」](#)

大学院の公開講義（乃木坂スクール）「前例を超え前例を創ったプロフェッショナルたち」での 長野敏宏・愛媛・御荘診療所長の講義から 2024.5.30

★[精神科病院における虐待等について～国際医療福祉大学大学院公開講義～2024.5.23 相原啓介さん](#)

★[第三者委員会調査報告書についての評価 2014.1.19 弁護士相原啓介さん](#)

★[「調査報告書・孝山会御中」2023.12.7 滝山病院第三者委員会・伊井和彦委員長](#)

★[滝山病院事件の背景と課題 2023.11「響き会う街で特集「精神病院の特殊性を打破するために」](#)

★[滝山病院と日本精神科病院協会会長の「闇」を明るみに出した 持丸彰子さんと木原育子さん・司会は増田一世さん](#)

（日本障害者協議会「すべての人の社会」2024.1）

など

医療・福祉問う「えにしメール」

発信23年、メル友ふくらみ3000人

大熊由紀子

◆認知症薬として大きく報じられたレカネマブ／効果が疑問・有害事象が高頻度・行政が援助すべきは別の領域

◆子宮頸がんワクチン接種勧奨再開で、新たな被害者が(涙)川田龍平さんも登場してシンポ。オンライン参加も可能

◆「身体拘束をやめたい」精神科病院のナース、作業療法士が「医療従事者の会」を設立／武見厚夫大臣に要望書

原稿の「依頼を受けた十月十日に発信した連称「えにしメール」のミダシです。医療・福祉や研究現場の志ある方々、霞が関、永田町、自治体の要職にある人など千人カ国少なく見積もって三千人ほどの方々が、週一回のこの「えにしメール」を楽しみにしてくださり、メルアドが変わるとすぐに連絡していただきます。

認知症薬レカネマブ効果疑問

子宮頸がんワクチンで被害者

精神科ナース拘束やめたい

それには、わけがあります。大手メディアが載せようとしないうち、日があつたに従って重要さが増していく、冒頭のミダシのようなニュースが載っているからです。

「えにしメール」は、朝日新聞という発信の場を失った

二〇〇一年に始めたので二十三年めになります。

同じ年に始まったのが、福祉と医療、現場と政策の「新たなえにし」を結び集います。大阪大学への旅立ちを祝って集まってくださった三百人余の方々は、いずれも、私とは電話一本

でつながる方です。けれど、この日集まったのは、医療、福祉そして行政と、お互い、まるで違う文化の住人。でも話してみると面白い、というので「来年もまたこのプレスセンターで会いたい」というのはなしに発展しました。

こと九月の第二十三回のえにし・シンポジウムのテーマは、「夢・願い・怒り／ボランティア」と国会議員の凄さ・面白さ」と「精神医療の闇／生み出す構造と改革への道」でした。

二つめのシンポには、朝日読売、東京、NHK、東洋経済、普及段はライバルのジャーナリストが登壇し、志を共有し合いました。参加して、この出会いに、感動した出版社の方が、出版不況の中、本にしてくださいることにになりました。



おおくまゆきこ

略歴

一九六三年朝日新聞入社
東京オリピック女子選手村取材
一九六五年科学部
一九八四年論説委員

コロナのせいで二〇二〇年からズームになりました。がつかりしていたら、思いがけないことに大好評なのです。海外に住んでいる方、ベッドから起きられない難病の方も参加できるようになったからです。東京までの交通費がいらないので嬉しいという声まで。

8つのシキタリ

- 【1】どんなに高名な人でも、「講演料ナシ」
- 【2】登壇は「権利」なので、「二生に一度」だけが原則
- 【3】モットーは前例を破ること
- 【4】集いには、毎回、ホスガ
- 【5】裏方仕事は、全員ボランティア
- 【6】目や耳が不自由な方のために、手話、磁気テープ、指文字で情報保障
- 【7】スポンサーは一切なし
- 【8】「えにし結び名簿」、席は籤引き

二〇〇一年大阪大学大学院教授
二〇〇四年から国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野教授
著書に『寝たきり老人』のいる国はない国』『福祉を変える医療を変える／日本を変える』とした社説＋α
『恐るる所にボランティアを』『物語・介護保険』『誇り・味方・居場所／私の社会保険論』他
この「えにし」の会には、八つのシキタリがあります。
二十三年もつづけているので、この「シキタリ」、すっかり定着しました。たとえば「地域包括ケア」シンポのパネリストは、カラちゃん、たんちゃん、はなちゃん、ただちゃん、さるちゃん、もりちゃんと呼び合って打合せ段階から盛り上がり、同志になってしましました。厚労省局長、認知症の本人、お医者さん、歯医者さん、ノーシャルワーカーなど職種はまったく違い、それまで、会ったことがなかった方々です。
「前例を超える創る」がモットーのこの「集い」で、認知症やLGBTの本人が次々と登壇したからでしょうか。その後ジャーナリストが安心して取り上げるようになり(14面)続く



トークセッション タブーへの挑戦
縁(えにし)を結ぶ会の集い

ました。
集いに毎年参加して下さる方
のあいだに、「えにしのシキ
タリ」が広がっていることに最
近、気がつきました。部長、先
生はよく肩書きで呼ぶのを、法

度にして、ファーストネームで
よびあうと、新しい絆を発想が
生れるのをぞうです。
朝日新聞という発信の場を
失ってから始めた三つ目の試み
は、大阪大学の教え子たちが



孤児院で育ったサヘル・ローズさんと
児童福祉法抜本改正をすすめた しおちゃん、塩崎大臣と現場の人たち

つくってくれた「えにし」の
ホームページ <http://www.yuki-enishi.com/> (ゆきえ
にしで検索すると先頭に)で
す。いま、数えてみたら、部屋
数はなんと五十一に増えていま

した。
朝日新聞時代の記事の延長線
にある「メディアと冤罪の部屋」
「医療事故から学ぶ部屋」のよ
うな硬い部屋だけでなく、「優
しき挑戦者の部屋」「らうんじ

えにし」のような、ほっこりする
部屋も。
そして、大学の教員になって
からはじめて公開講義シリー
ズ「前例を超える前例を創る」
に登場して下さった方々の記
録や、大学院生の修士論文や博
士論文を紹介する部屋も。
八十三歳になったいまも、こ
のようなことを続けているのは
なぜだろう。この原稿を書かせ
ていただいて、はっと気づいた
ことがあります。
三つの活動のすべては、朝日
新聞で最初に出会った支局長の
影響だったのです。
中野駅前で一階が焼き鳥屋と
いうビルの二階の支局に恐る恐
る入ったときのことです。浅黒
い顔の支局長が、新しい墨筆の
住所録をテーブルに置いて、厳
かに口を開きました。
「これからここに書く人たちが、
君の財産」
住所録はボロボロになり、新
聞社を卒業するときにはパソコ
ンの住所録になり、数えてみた
ら五千人近くになっていたいま
した。朝 起きた事件を多方には
説得力ある社説に仕上げなけれ
ばならない。そんなとき、この
「財産」に何度 助けられたこ
とか。
支局長は続けました。「十を

取材し、丸捨てて、一を書くこ
と。一を聞いて十を知るヤツは
記者としては落第だ」
この二つの教が骨の髄まで
しみこんだ結果が、「えにしメー
ル」えにしのホームページ「え
にしの集い」だったようです。
「恵まれない施設の子に、プー
ルの贈り物」と書いて、ひどく
叱られたときのこととも忘れられ
ません。
「恵まれない子」という文字
をその子たちが読んだ時、どん
な気持ちがあるか、想像してみ
たのか」
医療や介護の記事を書くとき
は、医療や介護を「受ける身」
のことをまず考えてしまう。そ
れは、あのかの竹内広支局長
の怖い顔のせいかもしれませ
ん。
信じやすく、認知症の新薬を
報じるニュースに飛びついて後
悔するに違いない人。
子宮頸がんワクチンの後遺症で
人生を台無しにされた女性、
精神病院で縛られている人た
ち。
それが、大手メディアが書くこ
うとしない。「えにしメール」の
テーマについての冒頭の記事の
ミダシにつながっているように
おもいます。

■「誇り・味方・居場所——私の社会保障論」(大熊由紀子著、ライフサポート社)

「霞が関官僚が読む本」(J-CAST)より



著者は、元朝日新聞記者(現在は大学院教員)。国内はもとより海外の医療・介護・福祉の現場を歩き、日本の介護を変えたとされる『寝たきり老人』のいる国、いない国(ぶどう社)など、「現場」「当事者」の視点から社会保障の変革を求めて発信を続けている。

朝日新聞退社後、「福祉」と「医療」、「現場」と「政策」をつなぐ志の縁結び係を名乗り、毎年4月には「新たなえにしを結ぶ会」を主催するなど、深い溝があるといわれる「福祉関係者と医療関係者」、「当事者・現場実践者と政治家・行政担当者」の橋渡し役として活躍している。

長年、現場に密着し、社会保障の在りようを考え続けてきた著者がたどり着いた結論は、人間にとって欠かせない「誇り」、「味方」、安心できる「居場所」が守られること。本書では、その理由について、①日本のケアの歴史、②内外の現場の実践、そして③著者自身の母の看取りケアの物語を通じて語られる。

ケアの社会化の歩み——歩進んで、ときどき後戻り——

動物の世界のケアは、親から子への一方通行なのに、なぜ人間だけが介護や介助をするのか。著者の答えは、

「人間だけが、利己的遺伝子の企みに逆らって生きるすべを獲得したから」

本書の第1部では、1970年代に登場した「日本型福祉社会論」以降、日本のケアの思想・文化がどう展開されていったかを辿る。

1973年のオイルショックを契機として、「福祉バッシング」が始まり、日本型福祉社会論(自立・自助を強調し、家族の相互扶助、ボランティアや民間活力の活用を奨励)の下で、福祉予算の伸びは抑えられた。ケアを要する人々は、予算制約の少ない医療保険が受け止めることとなり、雨後の竹の子のように生まれた老人病院や精神科病院に收容されることとなった。

その結果、日本独特の「寝たきり老人」が多数生じることになったという。当時、「寝たきり老人」という言葉は、日本において一般的だったが、欧州諸国を訪ねた著者は、彼の地では、「寝たきり老人」なる日常語がないことを知る。日本なら病院のベッドに寝間着姿で横たわっているような高齢者が、おしゃれをし、車いすに乗り、単身でも思い出いっぱい自宅で暮らしていたのだ。

日本の「寝たきり老人」とは、実は「寝かせきり」にされ、廃用症候群に陥った犠牲者だったとして、著者は、その代表作『寝たきり老人』のいる国、いない国をはじめ様々な機会を捉えて、発信していく。

平成の時代となって状況が変わり、介護の社会化の流れが動き出す。消費税導入を契機として自民党が参院選で大敗北を喫するという政治史上の「事件」がきっかけで、「ゴールドプラン（高齢者保健福祉十か年戦略）」が誕生。これが後の「介護保険」へとつながっていく。

日本型福祉社会論で提起された「自立」概念も、障害福祉分野を中心に、正反対の意味で使用されるようになる。つまり、当事者自身が「主体的」に「自己決定」することを尊重し、「地域」で生活することを基本とする考えだ。

しかし、著者の目から見れば、ケアの世界における、こうした自立概念の転換も後戻りを繰り返しているという。精神病床の大幅削減という世界の潮流から外れ、未だに数多くの精神障害者が精神科病院で暮らしている現状、そして、この精神病床に認知症の人々が多数、入院している状況を憂える。

未だ多くの課題を抱える日本のケアの現場であるが、ケアの社会化が進む中で、世界に誇る独創的な実践も生まれている。

- ・奇想天外な幻覚妄想を体験した精神障害者がグランプリに輝く「幻覚・妄想大会」で有名な北海道浦河の「べてるの家」
- ・高齢者、障害者、子どもの区別なく受入れ、利用者自身が担い手となってしまう「富山型デイサービス」として有名な「このゆびと一まれ」

——これらはいずれも、「当事者」を真ん中に置き、「ケアされる側」と「ケアする側」の垣根を超えた実践を行う中で、利用者・提供者双方にとって魅力的な場をつくり出している。

こうした実践にこそ、ケアの未来があるというのだ。

プロフェッショナルたちの実践

本書の第2部では、著者が毎日新聞に2年半にわたり連載したコラム「私の社会保障論」に、写真や図を加えて持論を展開している。

続々、日本の医療・介護・福祉のプロフェッショナルが登場する。

山の上の特別養護老人ホームを解体して、地域包括ケアを実現した施設長、医療事故を「隠さない、逃げない、ごまかさない」を貫いた病院長、在宅ホスピスのパイオニア、在宅口腔ケアの道を切り拓いた歯科衛生士、逆転の発想「バリアアリー」でリハビリに革命を起こしたカリスマ作業療法士など、日本のケアを変えてきた人々の実践が紹介されている。

「一人では何もできない。でも、まず、一人から始めなければ」
「制度があるからやろうはダメ。いいものは国が追っかけてくる」
「理屈や命令では人はまとまりません。感動して仲間意識を持った時、みんな喜んで動き出す」

——など、プロフェッショナルの極意が伝えられる。

第2部で取り上げられている実践の共通点は、「誇り」、「味方」、「居場所」である。一例を挙げれば、東京都内で約1250人のホームレスの支援を行っている自立支援センターふるさとの会。住まいの確保から日常生活の支援、そして在宅での看取りまで、家族のように支える。特筆すべきは、約270人のスタッフのうち約100人が、自らも支援を受ける障害や病気を抱えた人ということ（ケア付き就労）。お互いが支え合うことで、人間としての「誇り」を取り戻している。

こうした日本の社会保障を切り拓いてきたパイオニアたちの実践を受けて、著者はこう語る。

「昔作られた法律の枠を超えたところにこそ、真の福祉があるようです。それを実現するために必要なのは、本人の願いへの想像力と、改革する度胸だと思えます」
「支える人が誇りと喜びをもって働き、支えられる人の誇りが守られる時、日本の社会保障制度は質と継続性を保つことができる」

母の看取りケアの経験—介護保険の枠内でデンマーク並みのケアが可能に—

第3部では、「末期がん、まだらボケ、要介護四」、「余命あと一か月」と言われた著者の母（享年95）が、4年半にわたって、自宅で様々な在宅サービスを受けつつ、旅立つまでの経験を語る。

退院直後は、母自身、「よその人が家に入ってくるなんてとんでもない」と言い張っていたそうだが、実際にホームヘルパーさんから足湯ケアなどを受けるうちに、すっかり気に入ってしまったという。

慣れ親しんだ自宅での生活は、病院とは大違い。病院では患者そのものだった母が、自宅ではよちよち歩いて台所に行き、皿を洗い始めたり、福祉用具専門相談員がトイレのドアを外し、手す

りを取り付け、高さを調節すると、自分でトイレが使えるようになった。病院でオムツをつけていたときは全く見違えるようになったそうだ。

著者曰く、「あと一か月」が「四年半」にも伸びたのは、「なじんだ家」の力ではないかとのこと。

著者の母を支えたのは、様々な「プロフェッショナル」と「商店街のみなさん」。

専門職として、かかりつけ医、ホームヘルパー、訪問看護師、ケアマネジャー、歯科医師・歯科衛生士、かかりつけ薬剤師、リンパドレナージの専門家など大勢のスタッフがケアを担ったが、基本的に介護保険の範囲内で対応できたという。

そして、母が長年暮らした商店街のみなさん(美容院、和食、中華、イタリアン、フレンチ、鮎、さぬきうどん、花屋、ブティック等)も、折にふれて、生活の支えになったそうだ。

「都会でも地域包括ケアが、しかも、介護保険の範囲で、デンマークなみに自宅で人生を全うすることが可能なことを、母は証明してくれたような気がします」

著者が考える「社会保障にとって大切なこと＝誇り・味方・居場所」が確信となった経験だったに違いない。

JOJO(厚生労働省)